

症例7 外出(徘徊)を止めようとするとう暴力を振るう

- ・ G氏 77才. 男性
- ・ 特記すべき既往症はなし

主症状

症状〔1〕群 数年前から物忘れが目立ってきた。

最近では、入浴のとき体を洗えない。

衣類は脱げても着ることが出来ない。

妻が死亡したことを理解できない。忘れている。

症状〔2〕群 些細なことで興奮し、息子の嫁にも暴力を振るいそうになる。

昼夜を問わず外出しようとする。外出すれば帰宅できない。

前に入院した病院では、外出を止めようとする人に暴力を振るった。ナースに怪我をさせたこともある。

生活歴

Gは、几帳面で仕事一筋の性格であった。家では全てを妻に依存し、縦のものを横にもしない生活を送ってきた。しかし、妻子には優しくかった。物忘れが目立つようになった3年前に、妻を癌で亡くした。その後は、5人家族の息子の家に引き取られて現在に至る。

【経過】

家庭では何もしなかったGは、妻の死後、不便な生活を続けていた。息子の嫁には、妻のような配慮を望むことはできなかった。このような生活の不便さや淋しさ、そして戸惑いや困惑などが、認知症を、時期を早めて出現させたと考えられる。

やがて、Gは願望(妻が生きていて欲しかった)が現実と混同し、「妻が生きている。死んではいない」と思うようになった。家に居ないのは「妻は入院中だからだ」と考えるようになった。そう考えなければ、Gの心は救われなかったのである。

ところで、妻が癌で入院していた時、Gは付き添いのために病院へ毎日行っていた。その経験でGは「病院で妻が待っている。付き添いのために行ってやらなければ」と考えるようになった。

思いつくと、部屋のなかで立ち上がる。しかし、玄関で、家族に「何処へ行くのですか」と聞かれるときには、自分が何のために外出しようとしたのかを忘れていた。そこで「別に……」と口ごもる。家族は「それなら、父さん、外は車が走っていて危ないから、お部屋にいてテレビでも見ている下さい」と言われる。したがって、Gは部屋に戻る。日に幾度となくこれを繰り返す。Gは、満たされない何かで頭の中がいっぱいになる。訳がわからず不機嫌になる。その結果、自分の行方をささげる者には暴力的になる。

私たちのGへの対応は、Gが「外出しよう」と思いつく前に、スタッフが「病院へ行きましょう。奥さんの付き添いに行きましょう」と、誘って外出することであった。歩いているうちにGは、外出の目的を忘れる。忘れても良いのだ。「病院へ行きましょう」と目的を教えることを繰り返し、歩いたのである。Gのなかに満たされないものが少しでも少なくなればそれで良いのである。妻についての色々な話を聞きながら、外出を繰り返した。Gの気持ちは、次第に落ち着いてきた。病院スタッフとGの信頼関係もしっかりしたものになってきた。

入院後2ヶ月が過ぎた頃、スタッフが「奥さんの付き添いに行きましょう」と言うと、「妻は死んだよ」とGは教えてくれた。次いで、Gは妻が亡くなった頃の出来事も少しずつ思い出してくれた。

【メモ-1】

会話が成立している程度の認知症の状態では、目的がない出歩きはほとんどない。本人が、歩き出すときの目的を思い出せなくなっていて、行動(出歩き)だけが残っているように見えるのである。

したがって、生活史から本人が願っていたことを探り出し、その願いをかなえる、つまり『過去の願い』の(自己)実現に協力することが適切な対応となる。

G の場合は、理解者(妻)がいないための淋しさと、子供たちから G の『存在価値』を無視されたことなどが、『特殊性』のある症状を出現させる大きな原因となったと考えられる。なお、信頼できる人(病院スタッフ)を得てから、G が『妻が死んだこと』を思い出したことは、私たち自身のそれまでの考え方を変えさせる出来事であった。

つまり、『徘徊』させることによって「出歩きの目的と現実を思い出させることができることがある」ということである。

【メモ-2】

● 徘徊について

『徘徊』とは、目的を持たずに歩きまわることと定義されている。

昆虫採集者が虫を求めて歩きまわるのを『徘徊』とは言わない。高齢者の認知症による出歩きを、私たちは『徘徊』と言っている。「目的を持っていない」と理解しているからである。

しかし、このような出歩く行動をしている高齢者を信頼し、尊敬し、安心させて、よく話し合えば、『徘徊』と言われている行動には、行動目標や原因があることを聞き出すことができる。

ある時期からは、歩き始めるとき、歩いているときなどに、行動の目的を思いついたり、忘れたりを繰り返しているのである。

つまり、「目的地を探ること」だけではなく、「何を考えたかを探す」ための出歩きにもなっているのである。

つまり、行動目標は、認知症の進行と共に、高齢者の記憶のなかからほとんど消えていく。その時、出歩くという行為が、この失われていく目標を無意識に再確認しようとして、探しまわる出歩きになっているのである。

つまり、『徘徊』とは、残された記憶と感情を高齢者が消失してしまうことから防衛し、生命を存続させるための、我々には意識できないが、高齢者の生命が所有する意志がさせている行為であるとも考えられるのである。

言い換えれば、『目標～夢』などの『未来』を失うと『思考する能力』が消え始めることを、私たちのからだ、即ち生命がもつ意志が知っていて、『出歩き』という行為に託して、高齢者を『認知症』の進行から守ろうとしている場合もあることがわかるのである。

この行為は、一般的な思考に基づく行為ではない。

【メモ-3】

●『徘徊』と言われている『出歩き』について

認知症の進行に応じて次のⅠ～Ⅳの4段階の『出歩き』の時期がある。

- Ⅰ ・ 健康の維持、家族への配慮・責任・義務感、過去の習慣などが出歩きの原因や目的となる場合がある。
『自己実現』と『存在価値』に関係し、いずれも出歩きが認知症の進行を抑制するための正当な行為となる。

(我々の思考による出歩きでもある)

出歩きの具体的理由例

- ・ 「健康を維持するために歩かなければ」
- ・ 「病院へ行かなければ。薬を貰いに行かなければ。悪くなると困る」
- ・ 「家を掃除に行く。家には誰も居ないから」
- ・ 買い物、支払いなどを済ませていることを忘れて、もう一度、目的の行為をしようとする
- ・ 「年金をもらいに行かなければ、妻に渡してやらなければ」
- ・ 「自分も働かなければ。仕事を探しに行かなければ」
- ・ 思い出せないことが頻繁になったための困惑・不安などのため、落ち着いていられなくなり外出。自分を落ち着かせるための外出
- ・ 「必要なもの(タバコなど)を買いに行く」
- ・ 配偶者(妻)が亡くなっていることを忘れ、病院へ「付き添いに行かなければ」としての外出
- ・ 墓参りに行こうとする
- ・ 「孫(または知人など)が病気だから見舞いに行かなければ」
などがある。

- Ⅱ ・ 現在の生活が、若い頃から願っていたり、期待していたような生活ではないとき、つまり『自己実現』ができていない生活、尊敬と感謝を受けることのない生活、『存在価値』を認めてもらえない生活……などから逃避するための外出がある。

- ・ 注意・命令・叱責・嫌味・愚痴・叱咤激励などが多い家のなかに居たくないための外出・出歩きがある。

(我々の思考による出歩きである)

出歩きの具体的理由例

- ・ 優しい人(祖父母・父母・兄弟・姉妹など)が居る、自分が育てられた昔の家へ行こうとする
- ・ 自分を信頼・尊敬・感謝してくれた子供たちの居た、昔の家へ帰ろうとする
- ・ 昔からの願い・計画・期待などを実現させるため
- ・ 「自分だってまだ働けるのだ。馬鹿にするな！」と考えることにより、「仕事がある」「まだ会社を退職していない」などと思い込み、仕事に出掛けようとする
- ・ 仕事離れや社会的地位離れなどができていない考え方により、自分の昔の功績や能力を誇示するため、会社や仕事場へ行こうとして外出。「会社に行く」「仕事に行く」と行って外出する。まだ能力があるから退職・引退などしていないと思っている。
- ・ 嫁が悪いということを知りて欲しかったため

- ・「働いていると思ひ込み、働いた分のおかねを取りに行かなければ」
 - ・「家族ではわからないことがあるので、自分が交渉しないと……」
 - ・「殺される。助けて！」と逃げ回る
- などがある。

- Ⅲ ・ やがて、高齢者は出歩くこと、歩くことの目的のほとんどを忘れる、失う。出歩きの理由についての答えは、次のようになる。「家に帰りたい」「歩けなくなりたくない」がほとんどとなる。

(我々の思考による出歩きと、我々がもつ潜在的な思考による出歩きと、我々が気付くことのできない生命の意志による出歩きなどが混在している出歩きの時期である)

出歩きの具体的理由例

- ・ いつも一緒にいる人が歩いているから、ついて歩いている。
 - ・ 何もすることがないから歩いている。
 - ・ 毎日歩いているから歩いている。
 - ・ 寝たきりになりたくないから歩いている。
- などがある。

- Ⅳ ・ かつて生命が出現した頃の、『食べること』『動くこと』『休むこと』だけが全てであった生命体の在り方を再現したような出歩きがある。

(生命を存続させる為の、我々には気付くことのできない、生命がもつ意志による出歩き)

出歩きの具体的理由例

- ・ 本能的な衝動による出歩き
 - ・ 落ちているものを(何でも拾って)食べるための出歩き
 - ・ 動いていることが、生命力を維持させる方法であることを知っているような出歩き
- などがある。

徘徊についての対応

徘徊と言われる外出、出歩きに対しては、高齢者が家族への配慮・義務を果たせるように、そして、もの忘れによる不安感や不満足感を持たせないような対応をするべきである。

また、出歩きの理由を高齢者が忘れてしまっても、その理由を思い出せるような出歩きに誘導すること。

そして、理由が思い出せたら、その理由の周辺の事情・出来事・関係する人たちをも思い出せるようにする必要がある。

さらに、高齢者が忘れていても、昔から願っていたこと、期待していたことの実現に、積極的に協力し、高齢者の『自己実現』の達成をかなえる対応が必要である。

同様に、高齢者の『存在価値』を高齢者と家族などが確認し合えるように配慮する必要がある。

【まとめ】

- ① 高齢者の出歩きは『自己実現』と『存在価値』の確認のための行為でもある。
- ② 出歩きの理由と目的の場所を忘れてしまっている高齢者は、『歩き回ること』によって、出歩きの理由と目的の場所を、無意識に思い出そうとしている。
- ③ しかし、最終的には生命を存続させるための、『生命がもつ意志』による出歩きとなる。

そして最終的には、動く(歩く)、食べる、休む(眠る)へと移行する。

以上の **I**・**II**・**III**・**IV** は、認知症の軽度・中度・重度・最重度に該当する症状である。